第10回

中学生訪中親善使節団報告書

平成13年３月24日(土)～３月29日(木)　６日間

南昌・上海・北京

Takamatsu International Association

財団法人 高松市国際交流協会

目　　次

1　団　員　名　簿 …… 1

Ⅱ　日　　程 …… 2

Ⅲ　使節団の活動状況 …… 3

Ⅳ　感　　想　　文 …… 9

高松市中学生訪中親善使節団団員名簿

団　　長	松　井　　保	高松市教育文化研究所 指導主事
同行看護婦	白　井　眞奈美	高松市民病院看護婦
同行職員	田　中　正　弘	(財)高松市国際交流協会事務局員
団　　員	安　藤　誠　子	高松市立桜町中学校
〃	飯　間　絵　未	高松市立鶴尾中学校
〃	乙　武　陽　子	高松市立下笠居中学校
〃	河　本　真　孝	高松市立桜町中学校
〃	鬼　無　麻　由	高松市立勝賀中学校
〃	木　村　一　裕	高松市立木太中学校
〃	今　　香伸子	高松市立紫雲中学校
〃	佐　伯　志　穂	高松市立紫雲中学校
〃	篠　永　有　美	高松市立紫雲中学校
〃	白　井　つかさ	高松市立下笠居中学校
〃	須　田　あさみ	高松市立協和中学校
〃	高　田　明　奈	高松市立紫雲中学校
〃	鍋　嶋　明　子	高松市立勝賀中学校
〃	浜　崎　奈津子	高松市立屋島中学校
〃	真　鍋　絵　美	高松市立紫雲中学校
〃	真　鍋　多　恵	高松市立紫雲中学校
〃	宮　崎　沙　月	高松市立古高松中学校
〃	宮　武　恵　里	大手前高松中学校
〃	森　　貴　幸	高松市立桜町中学校

日　程

2001年３月24日㈯～３月29日㈭　６日間

日次	月日（曜）	主　な　行　事　（時刻は現地時間）	宿　　泊
1	３月24日 （土）	9:00　アイパル発（専用バス） 13:30　関西空港着 15:35　関西空港発（CA922）→ 17:15　上海着 東方明珠塔見学、黄浦江見学	上海 ホテル日航
2	３月25日 （日）	上海博物館、上海動物園、南京路 玉仏寺等見学 18:21　上海発 → 夜行列車（K287）→ 南昌へ	上海 列車泊
3	３月26日 （月）	6:43　南昌着 8:00　朝食 9:00　南昌市人民政府表敬訪問 9:30　日中友好会館見学 10:00　滕王閣へ 10:30　滕王閣見学 12:00　昼食 14:00　八一起義記念館見学 15:30　八大山人記念館見学 17:30　歓迎会 19:00　ホームステイ	 ホームステイ
4	３月27日 （火）	8:30　日中友好会館集合 9:30　南昌市第19中学校への訪問、交流会 12:00　昼食 14:00　南昌市内見学 17:30　送別会 18:50　CA1512便で北京へ出発 21:20　北京へ到着	 北京泊 亜洲大酒店
5	３月28日 （水）	午前：故宮、天安門広場見学 午後：万里の長城見学	 北京泊 亜洲大酒店
6	３月29日 （木）	9:45　北京発（CA927）→ 13:40　関西空港着 14:40　関西空港発（専用バス） 19:10　アイパル着	

※CA＝中国国際航空

※中国での時間は、北京時間で表示（日本より１時間遅い）

使節団の活動状況

3月24日(土)　**●高松～上海**

3回の事前研修と歌や踊りの自主練習をこなした代表団、やや緊張気味の表情で集合時間の15分前に集合。研修で耳たこになった時間厳守が徹底されている。すごい！と、思ったらやはりいたいた、一人遅刻者が。

研修で松井団長から与えられたテーマは、「良い仕事には、良い準備」。そして「聞こうとしない、見ようとしないことは、聞こえないし、見えない」。出発式で全員もう一度この旅行の目的を確認し、元気に出発のあいさつをした。

バスの中では木村君と安藤さんの指揮で、「さくら」と「草原情歌」を練習。二人の指揮は堂に入ってきたが、歌声はちょっと。でも、本番に強そうな団員たちだから大丈夫だろう。中国語のテープを子守唄がわりにバスはUSJを横に見ながら関西空港へ到着。

飛行機の中は、周囲が全部中国語。少し緊張する。心の準備をしている間に上海へ到着。天気は予想に反して小雨で蒸す感じがした。何でも上海は天気予報の精度をあげるために取組中とのこと。ベテランガイドの朱さんの案内でバスは東方明珠タワーへ。残念ながら、霧で外が見えない。それにしても上海は高層建築ラッシュだった。

少しがっかりした団員を元気にしてくれたのが国際大飯店での夕食。団員の目の輝きがもどる。トマト＆卵のスープ（この組み合わせはこの後何回もお目にかかった）、鳥の唐揚げの煮込み、マーボー豆腐、あげ魚のあんかけ、小龍包、おこげ、そして不思議とポップコーンの香りがするチャーハンなどなど。団員たちに至福の時が訪れました。

上海にて

3月25日(日)

上海動物園にて

一夜明けて、中国初めての朝。6時10分にモーニングコール、6時50分にトランクを持ってフロントに集合、そしてパンダを見るために上海動物園に出発。なんでもパンダ見物は早朝がよいということで、朝食前のオプショナルツァー（？）となった。金網に手（前足か？）をかけて寝ている姿がとても可愛いと、生徒たちには、たとえ微動だにしなくてもやはりパンダはパンダであった。しばらくして起き上がり、しっかり私たちのカメラワークにサービスしてくれたのもありがたかった。

朝食をとり、8時30分には上海市内見学へ。まず訪れたのが上海博物館。1952年に創建、1996年に人民広場に移転して新たにオープンしたもので、堂々とした、まさしく威容を誇る建物である。展示室が4階まであり、青銅器・陶磁器から絵画・仏像・銅鏡など中国6000年間におよぶ文物が、数十万点収蔵されているという。番号を押さえれば一つ一つの展示品についての説明が聞けるという、トランシーバー的携帯用テープ各国語対応日本語版機（う～む、中国語的表現！）を手に手にしばらく自由見学とした。家具や少数民族工芸を展示した部屋もあって、見学に訪れていた世界各国の人々が真剣に展示に見入っている姿が印象的であった。4階まで中央部が吹き抜けで、左右にエスカレーターを配しているそのデザインは斬新かつ機能的で、上海市の国際都市らしさを垣間見たようにも思った。

上海博物館にて

その後、黄浦江沿いの展望台へ。昨夜は雨と霧のためによく見えなかった東方明珠放送テレビ・タワーも改めて見学できた。ここで写生していた小学生らしい一団の絵に、熱心に見入っているおじさんたちにちょっと感心！中国の人は好奇心旺盛だと聞いたことがあったが、確かにそのとおりの光景ではあった。

展望台を下りた所にあるお茶屋さんで一服。たくさんの種類のお茶を次々とサービスしていただき、流暢な日本語を話すおじさんにお茶の話を聞いて、ついついお茶はもちろん茶器まで購入してしまったのは私だけではなかった。

バス移動の後、「紫錦城百貨」なるデパートの6階にあるレストランで昼食。たくさんの人でにぎわう通りで、太いさとうきびを目の前で搾って売る行商人から「おいしいから、飲め」とコップに半分ほどいただいた「さとうきびジュース」はすごく甘くてちょっと郷愁を覚える味であった。（ただし、そういうのは以後慎むようにと、同行・引率の看護婦である白井さんから厳重注意をいただいた。）

まるで東京の新宿と渋谷を合わせたような街並みと人出の「南京路」では、引率の田中さんもちよっと驚いた、大胆とも言える一時間足らずの自由行動！世界的なチェーン店でもあるHOTEL・SOFFITELもある、たいへんに広く、しかもすごい雑踏の中であったが、しかし、団員はきちんと時間どおりに集合。ちょっと生徒たちがたのもしく見えた瞬間でもあった。その後訪れた玉仏寺での見学では、いかにもこれが中国！といった印象を持つことができた。日本の東大寺や法隆寺のルーツともいえる雰囲気が感じ取れたようにも思える。

夕食のホテル「龍門賓館」がLONGMENHOHELと大きく掲げられていたのも、なるほどと思わせられ、言語のおもしろさを感じた。

さて、午後6時21分上海発の夜行列車に乗車して一路南昌へ。トランクを持ち、狭い車内に移動して割り当てられたコンパートメントへ。同行の陳さん、曽さんのご努力により2段ベッド・ドア付きの個室タイプに落ち着くことができた。謝謝。団員は明日のことも考え、午後11時には消灯にし、明日は午前5時半には起床にしようと相談。狭い個室ではあったが、住めば都、けっこう生徒たちは寝台列車の一夜をそれなりに楽しみ、眠ることもできたようであった。

3月26日(月)

南昌市に午前6時43分着。生徒たちのほとんどは、6時頃には車内で制服に着替えて、トランクの整理も終了していたようだ。到着と同時に、南昌市の職員の方々が出迎えてくれ、車内から荷物を出す作業も手伝っていただいた。まずはバスで宿泊先でもある高松・南昌友好会館（日中友好会館）へ。高松市で研修の経験を持つ張 知明さんの配慮で、朝食はおかゆを中心に食べやすい中華料理が用意されていた。謝謝。

八大山人記念館にて

朝食後、市内の文化遺産等の見学へ。まず江南三大建築物の一つである「滕王閣」を訪問。唐の時代の653年に建てられたが、その後、建築と損壊を繰り返し、最近全面修復されて一般公開されている。建物の前庭にあたる所には、日本の神社仏閣にある狛犬に似た大きな像が一対あり、ここでも日本文化と発祥を同じくする大陸文化の一端に触れることができた。エレベーターが修理中ということで、階段を利用して、日本でいう天守閣まで登ったのも思い出に残ることだろう。思い出といえば、借用料5元なりを支払って松井団長が王様の扮装をして玉座に座ったのも、たいへん印象に残るひとコマであった。

市内の商店街に近いところでお土産を物色した後、昼食。市内の交差点で見かけた自転車の列や自動車、人の動きと表情には、上海とはまた違った中国らしさが感じられた。その後訪れた「八一起義記念館」では、現代中国の礎を築くきっかけにもなった歴史的武装蜂起の一部始終が克明に写真や絵画、記録文等で展示・説明されていた。ここでの曽さんの熱血説明には頭が下がる思いがした。

続いて、「八大山人記念館」へ。明代末期から清代初めにかけて活躍した書画の巨匠である八大山人（朱道朗）が隠遁した場所を記念館としたもので、市の中心部からバスで30分程の所にあった。悠々とした田園風景の中の川沿いにあり、その周囲の風物のかもし出す雰囲気もまた、中国らしさを感じさせるものであった。

午後5時、日中友好会館で南昌市人民政府の方々をお迎えしての表敬。劉偉平市長さんはじめ多くの方々が笑顔で迎えてくださり、団長と市長さんの挨拶の後、

日中友好会館で劉市長と

団員も一人ひとり中国語で自己紹介をすることができた。贈り物の交換があり、会場を変えて夕食を兼ねた歓迎会が催された。

歓迎会がまだ終わらない頃から、今夜の団員のホームステイ先であるホストファミリーの方々が友好会館にお迎えに来てくださり、会議室はたいへんな熱気に包まれていた。団長が陳さんの通訳で簡単な挨拶をし、次々と団員の名前が呼ばれ、ホストファミリーの中学生が手に手を取ってそれぞれの家族へと導いてくれた。張知明さんらの配慮で、各ファミリーは引き受けてくださる生徒と同性の中学生がいる家庭を用意してくださっていたので、子どもたちはそれだけでリラックスできたようであった。最後の団員を見送った後、引率の３名は一抹の不安と期待、そしてなんともいえない寂しさも味わったのであった。

３月27日㈫

本日は、朝８時30分に友好会館にホームステイ先から帰着・集合、そして９時には南昌市第19中学校へと出発の予定。集合に遅れることなく、団員が次々とお世話になったお家の方々に送られて、友好会館に到着。手に手にいただいたお土産や花束を持って、やや緊張気味に昨夜と今朝の出来事を楽しそうに語り合う生徒たちをせかしながら、急いでトランクと手荷物の整理の後、ロビーに集合。出発までの合間をみて、各班ごとに出し物の打ち合わせやパラパラの練習をする子どもたちを見て、かなりきついスケジュールをものともせず活動する、その主体性とエネルギーに感心。ついでに会館の玄関先で全員合唱の練習もした私たちであった。

第19中学校へ着くと、玄関先では小旗を持った小学生たちが、左右に数十人整列して私たちを待ち受けていてくれた。校長先生や職員のみなさんと挨拶するやいなや、小学生たちの「おはようございます！」の大連呼。まさしく熱烈歓迎の嵐。取材に訪れているテレビカメラに追われながら、その真只中を歩く団員たち。そして案内の女子高校生２人に導かれて校舎内の会場へ。

会場の教室内では、団長と校長先生との挨拶とお土産の交換、そして団員の自己紹介。校舎内の教室や授業風景を参観した後、いよいよ交流会の会場となる音楽室（？）へ。この第19中学校は、中学校と高等学校が併設されていて、今年から中・高一貫教育に近いものが実施されるそうで、休み時間に運動場で行われる中・高校生一緒の全校体操は壮観であった。

休み時間の全校体操

パラパラを披露

交流会は第19中学校中学生の司会で始まり、なんと第19中学校の生徒の最初の出し物に「さくらさくら」の合唱が。実は「さくらさくら」は、私たち使節団の全員合唱の中の１曲でもあり、つまり『かぶった』のである。幸いにもというか、いろいろ準備の都合もあって、無伴奏での練習をしていたので、ちょっと違った日本らしい味を聞かせてあげられたのではないかと思う。（これは自画自賛？）

次々と交替で中国と日本の歌や踊り、演奏が続く中、私たちの目を引いたのはやはり、中国特有の胡弓の演奏やきらびやかな衣装に身を包んだ中学生・高校生の踊りであった。特に踊る女子中・高校生のすばらしい笑顔には感心すると同時にうらやましくも思った。笑顔は、人と人との交流の基本であろう。各班ごとの出し物もそれなりの好評を得て、最後は第19中学校の生徒・校長先生も巻き込んでのうちわを持っての総踊り。２時間あまりの交流会も終わり、その後学校のすぐ近くのレストランで校長先生方と会食。

南昌商場でのショッピングの後、友好会館に戻って少し休憩して早めの夕食を兼ねた送別会へ。メニューにもいろいろ配慮していただいたらしく、この夜はなんとあるテーブルではトンカツも出てきて団長以下大喜び。午後５時には飛行場へ出発し、午後６時50分の便で北京へ。北京の飛行場近くでの、上空からの夜景もすばらしいものであった。ただし、さすがに連日の疲れのため、飛行機内で熟睡の団員が多かったようではあるが。

３月28日㈬　●北京

疲れを知らないパワーと飽くなき好奇心のため、陳さんから「熱熱鬧鬧（ルールーナオナオ賑やかで活発という意味）」的使節団と命名された団員一行、北京での活動は朝食バイキングから始まった。前日までの疲れはどこえやら、少し冷えたが快晴の北京に元気に出動。フリーマーケットや立ち並ぶ高層ホテル、伝統ある建物などを横目に、バスは紫禁城へ。北京の街角には「2008年OLYMPIC」の看板が目立つ。昨日の北京空港、一直線で市街地に入る大高速道路、新築されるホテルなどインフラの整備もさることながら、朝の公園で卓球や太極拳をする人たちに中国の活力を見る気がする。

天安門、紫禁城ではひたすら歩く。ガイドさんが一生懸命紫禁城の消火用の水がめについて説明してくれたが、実際は量が少なく役に立たなかったとのこと。不覚にも引率が遅れを取り団員たちに迷子扱いにされる。無念。

天安門広場にて

上海、南昌で鍛えた交渉力を武器にお土産屋さんで買い物をした一行は、午後はお待ちかねの万里の長城へ。故毛沢東主席曰く「不到長城、非好漢」（長城に致らずんば、好漢にあらず）。そこで、元気に長城を走り回り、どういうわけか駱駝や熊も見学できた一行、さすがに帰り道は疲れ果てて、全員熟睡。昼間の道中で初めての静寂の瞬間が訪れた。これで引率も一休みできる、と思ったのもつかの間、夕食の北京ダックでは激しい生存競争がおこり、団長自らが平等に団員に分配しなくてはいけなかった。

３月29日㈭　●北京～高松

朝６時30分にチェックアウトを済ませ、朝食もバスの中と慌ただしくホテルを後にした一行、北京空港では、全行程を共にしてくれた陳さん（南昌市外事弁公室職員）になごりを惜しみながらのお別れ。ある時は交渉人に、またある時は中国語の先生、そして優しいお兄さん役と本当にたよりになる人でした。陳さん、「太辛苦了！」北京から関西空港への直行便に搭乗手続きを済ませ、空港で中国最後の買い物を楽しんで定刻に離陸。

中国に比べると妙に人が少なく感じる関西空港からバスに乗って一路高松へ。高松に到着した時は日も暮れてしまったが、一同出迎えの人たちと明るく再会。彼らの元気な笑顔が21世紀の日中交流に生きていくことを期待しながら、熱熱閙閙的使節団は解散しました。素晴らしい団員、団員を温かく送り出してくださった家族のみなさま、中国での手配をしてくれた南昌市政府の方々、その他様々な手配をしていただいた、高松市国際交流室と㈶高松市国際交流協会のみなさんに、引率一同感謝しております。「太謝謝！」

感　想　文

三つの幸せ

高松市教育委員会教育文化研究所
指導主事
松井　保
（現:学校教育課研修係長）

「天の時、地の利、人の和」という言葉を、何ごとか事を為そうとする時、私はよく思い出します。今回の中学生訪中親善使節団の団員の一人として訪中することが決まった際も、ふと、頭に浮かびました。

一人の故障者・けが人もなく、無事に高松に帰着することができた今、いろいろと恵まれたこと、つまりは「よかったなあ」と、思える事柄を三つ数え上げてみたいと思います。

一つ目は、まさしく天候に恵まれたことです。1日目の上海に到着した夕方こそ多少の雨混じりの天候でしたが、後は、例えば北京ではここ2週間内では最高の天気だと言われたくらいの晴天に恵まれました。時期的にもよい時候であったと思います。

二つ目は、訪問先である南昌市と上海、北京それぞれの地の特徴ある風物・文化を見聞することができ、さらに、同行いただいた南昌市の陳さん、曽さんをはじめお世話いただいた方々の心配りと友情に恵まれたことです。南昌市の悠々とした田園風景と、私たちがもう忘れがちになっている素朴な生活ぶり、無垢で天真爛漫な子どもたちの笑顔は、とても印象的で楽しい思い出となりました。

三つ目は、団員として元気で明るく、活動的な生徒たちに恵まれたことです。今までの団員の中で今年が一番元気だ（騒がしい？）と、同行の方にお墨付きをいただくほど明朗活発な団体であったようです。引率の田中さん、白井さんのお二人も、私にとってとても心強く一緒にいて楽しい仲間でした。交流会で見せてくれた、団員の一生懸命で若者らしいすがすがしさは、本当に気持ちのいいものでした。そして、ホームステイ先から朝帰ってきた時の、ちょっと疲れが見えるけれども、熱気をおびた子どもたちの笑顔はすばらしいものでした。「いい仕事の前には、いい準備がある」また、「見ようとしないものは見えない」と言い続けてきた私に見事に応え、実践してくれた生徒たちでした。

さて、最後になりましたが、南昌市外事弁公室の張さんをはじめ．ホームスティでのホストファミリーのご家族や各機関の方々にたいへんお世話になりました。厚くお礼を申し上げて結びといたします。

滕王閣の王様

中学生訪中親善使節団に同行して

高松市民病院看護婦
白　井　眞奈美

中学生訪中親善使節団に随行という役目をいただいた時には、大変不安でした。19名もの健康管理が私一人でできるだろうか、行き先は中国である、向こうで病人が出たらどうしよう…次から次へと頭に浮かんできます。しかし、中学生たちと出会って、そんなことは心配ないと確信できました。みんな元気で体力も十分ありそうでした。

３月24日大勢の方々に見送られ高松を出発し、上海に降り立った私たちを迎えてくれたのは、広大な大地とパワーあふれる人の波です。初めて中国に来た中学生たちの目にはこの景色がどのように映ったのでしょうか。私は、７年ほど前に中国を訪れたことがありますが、その時に比べても驚くほど近代的になっていました。しかし、ビルの間から屋台で食事をする人々や、洗濯物が干してある風景が見え隠れして、生活が感じられました。

二日目の夜行列車で車中泊という体験も初めてです。私たちの乗り込んだ車両はコンパートメント式になっていましたが、となりの車両は中国人でいっぱいで、通路で飲んだり食べたりと、生活感があふれていました。私も途中の駅で買ったカップラーメンを夜食に食べ、満腹感を感じながら熟睡できたのには自分でも驚きました。

南昌市は、上海と違いゆったりと時間が流れていると感じました。滕王閣では、このまま何もかも忘れて一日中過ごしたいと思ってしまいました。しかし、私たちには大切な役目があるのです。夕方からの南昌市人民政府表敬訪問では中学生たちの顔が引き締まってきているのがよくわかりました。全員中国語で自己紹介ができ、バスの中でまで練習をした研修の成果だと感じました。やがて、ホストファミリーが紹介され、緊張した顔をしてそれぞれのホームステイ先へと出かけていく姿を見て、思わず「がんばれ…」と心の中でつぶやいていました。19人のわが子を送り出す母の気持ちでした。翌朝ホストファミリーに送られ帰ってきた中学生たちは、みんな晴々した表情をしていました。「楽しかった」「ご飯をいっぱい食べさせてもらった」「デパートへ連れて行ってもらった」とホームステイ先での話をしてくれるのを聞いて、ほっと一安心、またまた親心でした。第19中学校ではバスが着くやいなや、「おはようございます!!」の大合唱で熱烈な歓迎を受けました。ホームステイ先の子供たちと再会した中学生たちは、歌や踊りを通してお互いの関係を深め、それぞれに親善使節団員として友好の役割を果たしたと感じました。南昌市では観光・食事も多彩で、これらは南昌市外事弁公室の方々のお心づかいであると聞き感謝しています。

最後の土地北京では、疲れもたまり緊張も解けて体調をくずす者が出てくるのではないかと懸念していましたが、中学生たちはますます元気で、最後までお土産を求めて値段交渉に励んでいる彼らの姿を見ると、これからの高松も心配いらないと感じました。

３月29日全員無事に高松に到着し、迎えに来られたご家族と共に帰る中学生たちを見送り、私の役目は終了しました。10回の中学生訪中親善使節団の中で、一番にぎやかで元気が良いと陳さんをうならせた19名の中学生といっしょに過ごしたことは、私にとっても貴重な経験となりました。また、彼らにとってもこの経験が国際交流だけでなく、これからの学生生活や人生においても有意義なものになると信じています。

今回、私たちのお世話をしていただいた陳さんをはじめ、南昌市外事弁公室の皆様、また中国で出会ったたくさんの皆様に心からお礼申し上げます。

最後になりましたが、松井団長先生、田中さん、事前学習からいろいろご配慮いただきました高松市国際交流室・高松市国際交流協会の皆様に感謝いたします。

熱熱閙閙的使節団

(財)高松市国際交流協会
事務局員
田　中　正　弘

第10回目を迎えた中学生訪中使節の引率として、日中関係の未来を担う中学生と共に友好都市を訪問し、躍動する中国で、素晴らしい引率メンバーや団員、中国の方々との交流をする機会を与えてくださったことに心から感謝しています。感受性も高く、可能性を秘めた現代っ子の中学生たちが中国での異文化体験を通じ、何かに気づき、それを将来に活かし、日中交流の未来を創造していく。そのような場に立ち会うことになり引率としても、大変責任を感じました。

さすがに厳しい試験（？）、作文や面接をパスして団員に選抜されたメンバー、一人一人が元気で個性的な、そして協調精神もある学生たちが訪問団に集まり、最近の中学生を知るという点でも大変面白い機会になりました。また、団長の松井先生、看護婦の白井さんという頼もしい引率仲間に恵まれ、大きなトラブルもなく、全体として明るく楽しい親善使節団になりました。

中国での交流会に備えての練習でも、伝統的な日本の文化の紹介に飽き足らず、現代の日本を紹介しようと意欲的なメンバーは、パラパラからモー娘まで自分たちでビデオやテープを録画して練習、さらに３回の公式研修では不足した練習量を補習などで見事に補い、インターネットでもしっかり情報収集。わからないことは、一生懸命に聞く、ともかく積極的でこの中学生たちが大きくなったら「日本の未来」も明るい、と感じました。

さすがにホームスティについては言葉の問題もあって不安な様子でしたが、終わってみると泣いたり、笑ったり、文化の違いにとまどったり、何はともあれ異文化体験をこなしてきた、爽やかな顔をしていました。

学校あげての大歓迎を受けた第19中学校での交流会では、おどりの練習の成果もあり、南昌市の中学生たちとの交流も深め、高松市の代表団としての役割を見事にこなし、南昌市の陳さんからも、今年は熱熱閙閙的（活発で賑やかな）使節団だね、とお褒めの言葉をいただきました。

国際交流協会にいると、友好都市や中国の話を聞く機会が非常に多いわけですが、実際に中国に行くと「地大・物博・人多」という中国の形容詞を改めて実感。特に、「人多」。上海の南京路に湧くように出てくる人の波を見ていると、一体この人たちはどこから来て、どこに行くのか圧倒されます。

13億の人間が織り成す複雑な世界の一端を、中学生時代に親善使節団の一員として訪問し、その世界との絆を作ってきたことは、団員全員にとって貴重な体験になったと信じます。

最後になりますが、お世話になった南昌市外事弁公室や南昌市の方々、何があっても動じない団長の松井先生、明るく優しいお姉さん役を務めていただいた白井さん、団員の子どもたちを送り出してくださった、ご家族の方々に感謝します。

今回参加した団員の一人一人が21世紀の高松の国際交流を推進する力になることを願っています。

張　知明さんと

謝　　謝！

高松市立桜町中学校
安　藤　誠　子

私にとってこの旅行は、言葉を越えた友情とたくさんの素晴らしい思い出が生まれたものでした。

24日、上海に着いたとき、まず初めに、「何か、空気がちがう…」と思いました。それは何だか、とうとう中国に来たんだ、という緊張感を伴うものでした。

25日、朝には、中国のシンボルとも言えるパンダが見えてうれしかったです。そして、その夜の車内泊も忘れられない思い出です。一気に友情が深まった、という感じでした。車内から見えていた景色もきれいでした。

26日は、朝からドキドキしていました。一番楽しみだったけれど不安でもあったホームスティがあったからです。日中友好会館で、ホームステイ先の「童珍」に手をひかれて車に乗ったときは、何とも言えない緊張感と不安でいっぱいでした。でも、その半面、温かい、中国の家庭に溶けこむことができる、といううれしい気持ちもありました。童珍は、車の中で、私が話すかたことの英語と中国語を必死に理解しようとしてくれました。私の話した言葉が通じたときは、何だかとてもうれしい気持ちになりました。私の話す中国語の中で、きちんと通じたのは、「謝謝！」だけだったけれど、この一言だけですべてが通じた気がしました。

27日、朝は、ホームスティ先でみんなの体験談でいっぱいでした。一日だけだったけれどたくさんのホームスティ先での思い出は、語り切れないほどでした。

中学校訪問では、交流会を通じて、中国の文化に触れることができた気がします。

28日、北京では、故宮という美しい建物を見ました。映画で観たことがあるような風景に感動しました。そして万里の長城という、世界的に有名な建物を見学できてすごくうれしかったです。実際に上まで上がることができて、最高でした。

中国での思い出を振り返ってみると、毎日毎日が感動でとても素晴らしいものだったと思います。「謝謝！」私が覚えた中国語の中で最も素敵な言葉だと思います。そして旅行中一番たくさん使ったのもこの言葉です。引率の先生方、国際交流協会の皆さん、家族、ホームスティ先の皆さん、そしていっしょに中国へ行った皆さん、楽しい思い出を謝謝！この体験をこれからに生かしてがんばろうと思います。再見！

万里の長城にて

素晴らしい6日間 ～心の宝物～

高松市立鶴尾中学校
飯 間 絵 未

私は、今回の中学生訪中親善使節団の一員として、中国に行くことを本当に楽しみにしていました。しかし、選考されるかどうか自信があまりなかったので、決定の知らせを受けても、しばらくは実感できませんでした。でも出発の日を迎え、学校の友人や先生が次々に見送りに来てくれた時、初めて中国行きを実感することができました。

そして、出発から何時間もかかって着いた上海では、街の風景を見てびっくり！私がイメージしていたのとは違い、高層ビルや西洋風の建物が建ち並んでいました。歴史の授業で習った事を思い出し、イギリスの影響が残っているんだなと感じました。その日の夕食は、初めて味わう本場の中華料理で、みんな少し興奮気味でした。翌日も上海市内を見学し、いよいよ夜行列車で南昌へと向かいました。

早朝から、南昌市内の名所や旧跡を見学した後、不安でいっぱいだったホームステイを体験しました。最初は、一人だったこともあって、話が通じるかどうかとても心配でした。しかし、ホストファミリーの人たちは、おもしろくて優しい方ばかりでした。特に同じ年の娘さんは、まるでお姉さんのように親切に接してくれました。翌朝はお寺や公園等に連れていってくれました。その日に訪れた市内の中学校では、私たちを大歓迎してくれました。学校の中の見学では、理科室の設備や英語の授業の様子を見て、その施設の立派さや校内の美しさにに驚くばかりでした。学校の設備は中国の方がはるかに進んでいると思い、少し悔しかったです。夕方、ホストファミリーの人たちと別れて、最後の訪問地である北京に飛び立ちました。

北京で印象に残ったのは、何と言っても万里の長城です。遺跡好きの私にとって、一番期待していた所でした。天候にも恵まれ、遠くまで見渡せる景色は最高でした。友達と一緒に上まで走って行こうとしたけれど、あまりに長く坂が急で、途中でリタイアしてしまいました。これが本当に人の手だけで造られたとは、信じられませんでした。私は中国のスケールの大きさに驚かされるばかりでした。

今回の旅行では、言葉は通じなくても、中国の文化に触れ、中国の人たちのあたたかさを感じ取ることができました。そして、いい仲間たちに出会い、毎日が楽しく、充実した日々を送ることができました。この6日間の旅は、私にとって心の宝物となりました。お世話になった交流会や引率の先生方、仲良くしてくれた友達に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。「謝謝！」

八一起義記念館・英雄達の銅像にて

初めての海外、「中国」

高松市立下笠居中学校
乙　武　陽　子

私は、初めての海外旅行に不安と楽しみを抱いていました。本屋で買った、中国語、英語、日本語が同時に書かれた本を見ながら、これで大丈夫かなあ、私の言葉は通じるかなあと不安いっぱいでした。

関西空港から上海に向けて、青空の中飛びたちました。上海空港を出ると、街には、人、車、自転車があふれ、中国に来たことを実感しました。それから私は、中国の文化や歴史を見たり、ふれたり、充実した旅を続けました。

中国の建物を見た時、その大きさに驚きました。故宮も天安門広場も万里の長城も想像以上に広く、大きく見えました。

万里の長城に登った時、本当に人間が作ったのだろうか、どれほどの歳月がかかったのだろうか、これは中国の王朝名が秦だった頃、始皇帝が作らせた物であるが、始皇帝とはどんな人なのだろうと思いました。

次に私の心に深く残ったのは、南昌市でのホームスティです。3月26日の夕方、歓迎会が終わった時、ホストファミリーの人たちが迎えに来てくれました。夕食はレストランに連れていってもらい、とても甘いとろりとした肉料理をたくさん食べました。その後、ドライブをして夜景を見に行きました。そこからはたくさんのビルが、七色に輝いていました。

ホストファミリーの家で私は、じゃんけんゲームをして遊びました。言葉が通じなくて、困ったこともありましたが、とても楽しい時間でした。お母さんが、にっこりとしながら大きな紙に漢字を書いて、私に見せるのですが、読むことができません。首をかしげながら二人で顔を見合わせて笑いました。言葉の通じない二人にとって、ほほえみ合うことは、大切なコミュニケーションでした。朝、台所の方からコトコトと、音が聞こえてきました。私は、一瞬私の家（高松）に居るのかと思いました。

お別れの時、きれいな花束と記念の写真をもらいました。一晩だったけれど、思い出をいっぱい作ることができました。

驚いたことがありました。それは、買い物をする所で、日本語が通じたことです。「80元を30元にして下さい。」と値切ると、日本語で、「いいですよ。」と返事が返ってき、80元が30元にもなるのでそんなに安くなるのかとまたびっくりしました。

故宮（紫禁城）にて

私はいろいろな所で、値切れて買い物が楽しくなりました。

6日間で少し私は、成長することができました。

初めての海外体験、交流等で、言葉や文化は違うけれど、みんなで仲良くすることの大切さを学びました。

お世話になったホストファミリーの人や、国際交流協会の皆さんや、団長の松井先生、田中さん、白井さん、送り出してくれた家族に感謝しています。

日中友好関係がいつまでも続くことを祈っています。

僕から見た中国

高松市立桜町中学校
河本真孝

僕が中国に行ってまず感じたことは「大きい」ということでした。上海の街の規模・道の広さ・人の数に驚かされました。２日目に見学した上海博物館では通貨・絵画・工芸品などが展示されており、中国の歴史や文化の進歩をふつふつと感じました。また、玉仏寺では、各仏像の前に置いてあった座布団のようなものに中国の人々がひざをつけて深くおじぎする習慣があるということを学びました。

２日間上海の街を見学しました。上海は西洋人の手によって近代化を遂げ、中国一の外貨獲得都市としての役割を果たす一方で、無計画な工業・住宅団地の開発によって交通機関の建設が難しくなるなど様々な問題を抱えていると言われています。学校の社会科の授業で中国の問題点などについて学習していたけれど、この旅行で改めてそのことを感じました。

３月26日から滞在した南昌市は今の中華人民共和国の元となった共産党軍の蜂起の発祥地として有名です。そこでは千年以上の歴史を持つ滕王閣や八一起義記念館などを見学しました。中国の皇帝や共産党と国民党の戦いの歴史がよく分かりました。

一番楽しかったのはホームステイと中国の中学生との交流でした。ホームステイでは向こうの食堂に連れて行ってもらい、おいしいものをたくさん食べました。また、夜の街を見学したり、お互いの学校や家族のことについて話し合ったりして楽しい時間を過ごしました。

交流会ではお互いに音楽やゲームをして楽しみました。また、向こうの中学校の授業の様子も見学して、英語や情報処理、理科などにもヘッドホンなどの機器が多く使われていることを初めて知りました。南昌市の市長さんや学校の方々にも多大なる歓迎をしていただきとても嬉しかったです。

南昌市は古い町並みが多く残っていて、伝統的ではあるけれど現在的な騒々しさも見うけられました。

３月27日から滞在した北京では故宮・天安門広場・万里の長城などを見学しました。故宮や天安門広場では皇帝の暮らしぶりとその時代の文化が伺われ、中国という国の偉大さに改めて驚かされました。また万里の長城を登ってみると空気が薄く、とても急な道でした。自分の体験からその昔に匈奴が侵入するのはやはり大変だったんだと感じました。何より二千年以上前にどうやってこんな大きいものを建てることができたのだろうという疑問も湧いてきました。

北京は古い町並みと新しい町並みが入り混じった京都のような都市です。首都としての役割だけでなく、多くの世界的文化財を持つ国際文化都市としての重要な役割も果たしています。

ホストファミリーといっしょに

僕はこの旅行に行く前、中国という国に対して「多少の貧富の差がある中で、他民族同士で共生するのは無理だろうな」と思っていたけれど、多民族国家で貧富が混じり合っているにもかかわらず当然のように生活している中国の社会。建造物や文化財などを見て感じた中国の文化。これらをこの旅行で少し理解できた気がしました。

中国とは多くの人々の手によって創り上げられた、大きな、偉大な国でした。そしてこの中国旅行でいろいろとお世話になった人たちに「ありがとう」のことばを送りたいと思います。本当にありがとうございました。

ちがう環境の新しい友達

高松市立勝賀中学校
鬼　無　麻　由

私は、この中学生訪中親善使節団に加わらせていただき、本当にうれしく思っています。なぜなら、今回の訪問で、たくさんの人たちと友達になることができ、ホームスティなどを通していろいろな事を学ぶことができたからです。

初めは緊張して、一緒に行った人たちと友達になれるかどうか心配でした。でも、同じ班の子や、他の班の子とも３回の事前研修の間に仲良くなれました。

私はこれまで、なかなか積極的に自分から進んで、友達づくりができませんでした。そして、そんな自分が嫌だったので、この親善使節団に加わらせてもらえると知ったとき、一番に、「団員は、たくさんの学校から集まって来て６日間中国で一緒にいるんだから、研修の時にがんばって友達をつくっておこう。」と思いました。この決心のおかげで、私にとって初の中国訪問はより楽しいものになりました。

また、ホームステイでも、ステイ先の同じ年の中学生、ウェイウェイや、ホストマザー、ホストファザー、そして、おばあちゃんと仲良くなれました。

最初は、まあ何とかやれるだろう、とホームステイを甘く見ていました。でも、班の友達と別れ、夜の南昌の街をホストファミリーと一緒にタクシーに乗って家に向かう時には、たいへん不安になってしまいました。そして真っ暗なマンションの階段を懐中電灯を持って登った時は、正直言うと、一体どんな家なんだろう、とますます不安がつのりました。

ところが、部屋に入ると何だか急にホッとしました。日本の普通の家と似たような雰囲気があったからです。部屋の中はとてもきれいに整えられていて、家族の写真などがあり温かい空気に満ちていました。

ただ、ウェイウェイはともかく、お父さん、お母さんと会話するのは大変でした。覚えておいた中国語では全然足りず、もっとたくさん中国語が話せたらどんなにいいだろう、と心から思いました。

ウェイウェイと話すのは英語でしたが、全てが通じるわけではありません。日本語なまり、中国語なまりの英語で、少しずつ違う発音のせいで分からなかったりしました。

おばあさんとは言葉では一言もしゃべりませんでした。そのかわり、全てジェスチャーで会話しました。夕食の時、「これはおいしいよ。食べてみなさい。」と言ったのが分かったし、「あなたは14才？背が高いねえ。」と言われたのも何となく分かりました。ジェスチャーだけでここまで通じるのかと、とても驚きました。そして、下手によく分からない中国語を話して話をこじらせるよりも、こちらの方が上手くいくものだと思いました。心で話す、心で聞くというところでしょうか。

私は中国で過ごした６日間と、その前の研修で、精一杯積極的に自分の事をよく知ってもらい、相手の事を理解するよう努力しました。その結果、自分とは違う環境の友達ができました。それはとてもうれしいことです。何事も自分から取り組んでいくことが大切だということもよく分かりました。

これからも、この貴重な体験を自分の生活に生かし、何事にも興味を持って積極的に取り組んでいきたいと思います。

たくさん見て学んだ中国

高松市立木太中学校
木　村　一　裕

この記念すべき第10回中学校訪中親善使節団に選ばれたとき、うれしい気持ちでいっぱいでした。「隣の国へ行ける！」「外国へ行ける」というただそれだけでうれしかったのです。

まず、上海に行ってみて、とにかく、車や人が多かったです。その日は、あいにく雨がふっていたので、東方明珠塔に上って見下ろしたけど、きりでよく見えませんでした。でも、２日目から天気もよくなってきたのでホッとしました。７時もこないうちから上海動物園に行ってパンダを見ました。みんな写真をとりまくっていました。その後、博物館、南京路、玉仏寺等を見学し、夜行列車に乗り、南昌へ行きました。

南昌では、滕王閣や八一起義記念館や、八大山人記念館を見学し、いよいよ友好会館での人民政府の表敬訪問のときが来ました。カメラなどがぼくたちをとりかこむ中で始まり、自分の代表のあいさつが日本語でいえるかどうか、心配でした。でも、つまりながらも言えて、無事終わりました。

歓迎会が終わり、予定表を見てみると、次は、楽しみにしていた、ホームステイでした。

ホームステイでは、ホストファミリーがあたたかく出むかえてくれて、家に着くなり、電話をわたしてくれて、国際電話もかけることができました。そしてその後、ケンタッキーの店や、デパートなどに連れていってもらい、くつのひもまで直してくれました。丁星君とそのファミリーには、ほんとうにお世話になりました。それと、とにかく、11才なのに、英語が上手だったのもすごかったです。

４日目は、中学生との交流でした。中国の中学生は、歌やおどり、楽器の演奏などを披露してくれました。そして、私たちは、歌やパラパラ、けん玉、ふくわらいなどをしました。ここでの交流は、とても楽しかったです。

送別会では、中国の中学生との別れを惜しみながら会が終わり、飛行機で北京へ出発しました。北京のホテルでは、みんな夜おそくまで起きて、話しこんでいました。自分の部屋へもどると、ドアがあかなくて、フロントに行き、なんとかジェスチャーで、マスターキーを借りて開けるというハプニングもありました。

次の日、天安門を見学しましたが、とにかく広い…。故宮も見学しましたがやはり大きい。故宮を全部見るにはなんと１週間もかかるというからすごい。そして万里の長城は長く、地平線にかすんで見えるまで続いていました。その後ホテルにとまり、飛行機で関空まで飛び、バスでアイパルまでもどりました。

この６日間は貴重な６日間でした。数えきれないほどたくさんのことを学びました。また言葉が通じなくても気持ちがあれば、おたがいに分かりあうことができることも実感しました。

これから、中国に興味をもち、中国だけでなく、世界に目を向け、文化や生活を学び、自分の将来に生かしていきたいと思いました。

ホストファミリーといっしょに

初めての体験

高松市立紫雲中学校
今　　香伸子

この中国での旅行で、心に残った事は３つあります。

一つ目は、やっぱり「ホームスティ」です。今まで、旅行は全部ホテルで、家族と泊まって、今まで通りの生活スタイルで、とても気楽、といったような感じでした。けど、ホームスティは、１人で、他の国の人の家族の家で生活するという、今まで経験した事のないものです。たくさんの不安や緊張をかかえながら行ったホームスティは、とてもすばらしい体験となりました。

ホームスティの中で一番心に残った事は、莎莎や、莎莎の家族にとてもやさしくしてもらい、たいへん安心できる環境を作っていただいた事です。言葉は全部英語で話し、莎莎に訳してもらいました。中国は英語の教育が進んでいるとは聞いていたけれど、こんなにすごいとは思っていませんでした。あまり英語の勉強をしていなかったので、少し通じ合わなかったりして、会話がストップしてしまった時もいくつかありました。だけど、どんな時でも莎莎から話を切り出してくれて、私は、ほとんど返事だけだったけれど、おたがい、とても楽しい時間を過ごせたと思います。

二つ目に心に残った事は、今まで教科書だけでしか見ることができなかった。「万里の長城を、自分の目で見、自分の足で万里の長城を踏めた事です。踏んだ瞬間、「夢にまで見た万里の長城に立っているんだ。」と、心から感動しました。

万里の長城は、男坂と女坂の２種類あることを知りました。私は友達と２人で登りました。私たちが登った坂は、男坂だと後から友達に聞いて、びっくりしました。女坂もそうかもしれないけど、男坂の方は、階段の一段一段が高く、足場の石が、とてもつるつるしていたので、すべりそうになりました。でも私たちは、男坂の一番高い所まで登りました。すごく、高かったので、空気が、だんだんうすくなって、少しえらかったけどがんばりました。がんばったおかげで、一番高い所から見る景色はとてもながめがよくて、すばらしかったです。帰りは、ビュンビュンとばして、走りながら下りました。坂がけっこうななめだったので、一度、いきおいがつくとなかなか止まることができなかったけど、とてもいい感じでした。

三つ目に心に残った事は、私たち団員がバスに乗ろうとしたら、一方の手が途中までしかなかったおじいさんが、バッグを持ってよって来て、私たちに「お金をください。」とでも言うように近よってきた事です。中国に行く前に、「近よってきた人にお金はあげたらだめ。」と言われていたので、お金はあげなかったけど、心残りになる思い出となりました。

この一週間の旅行は、私にとって、とても大切なものになったような気がします。

私をこの旅行に行かせてくれた方々に、「謝謝」。

八一起義館にて

中国で学んだもの

高松市立紫雲中学校
佐伯志穂

私は、中学生訪中使節団の一員として、中華人民共和国に派遣され、とてもうれしく思っています。この訪中で、言葉に言い表せないほどの感動と貴重な体験をしました。

一番感動したのは、やはり「万里の長城」です。秦の始皇帝が、北方の遊牧民族の侵入を防ぐために作られた、全長約6700kmものシルクロードを、私は、今一歩一歩踏みしめている。そう思うと全身に力がみなぎりました。階段がとても高く急で、何度が転びそうになりました。全部は登ることができませんでしたが、その一部分を登れたというだけで、心が熱くなりました。

そして、何よりも一番不安で緊張をしていたのは、ホームステイです。当初は、一人一家族ということでなおのこと、言葉が通じるかどうか、明日までやっていけるかどうか、とても心配でした。けれども、そんな不安は魏薇さん一家と、遊んだり、買い物をしているうちに、ほとんどなくなりました。しかし、言葉はなかなか通じず、辞書を片手に持ち、身ぶり手ぶりで、やっと通じるという有様でした。しかし、時が過ぎるのは早いもので、ホストファミリーともお別れです。何度も何度も、「再見！」「謝謝！」とずっと握手をしました。たった一日だけでしたが、家族になれた気がしました。

中国ならではの体験もしました。それは値段交渉です。最初はうまくいきませんでしたが慣れると、８元を４元に、15元を７元にとだんだん値切れることができました。とてもお気に入りのチャイナドレスも購入でき、大満足です。

私が最も驚いたことは南昌の中学校の生徒たちのお迎えです。たくさんの数の生徒たちが、とても盛大に歓迎してくれました。

また、学校の英語の授業では、一人ひとりヘッドホンをつけて、よく聞こえるように工夫されていました。私はできれば日本の学校でも取り入れて欲しいなぁと思いました。と同時に、すごいなあ、自分も国際人になるために、もっと英語の勉強をしようと思いました。

社会は今、私たちが好むと好まざるとにかかわらず、めざましいテンポで移り変わっています。世界中の人々は原始時代から今まで、すべて幸福を求め、一生懸命働いてきました。そしてみんな同じように喜び、悲しみ、怒りをもっています。国が異なり、人種が違っても人間誰しも幸せな生活を送る権利をもっていると思います。

北京のホテルにて

世界の人々みんなが、人類愛という強いきずなで結ばれ、たがいに助け合いながら生きていける世界、そういう世界を実現するために、私たちはどういう働きをしなくてはならないかと考えさせられました。

この、中国で過ごした６日間は、とまどいと不安の連続でしたが、このことが、これからの私の人生の心の糧として、大きな希望と信念を与えてくれました。

最後になりましたが、松井団長先生を始め、田中先生、白井先生、国際交流協会の方々、最後まで仲良くして下さった団員の皆さんと、中国で出会った方々、心から感謝します。「謝謝」

中国まるごと６日間!!

高松市立紫雲中学校
篠　永　有　美

私はこの訪中親善使節団での体験を通して自分の知っている世界をさらに広げることができました。日本にいれば当たり前のことでも、他の国ではそれは通用せず、その国独特の考え方があるということに気付かされたのです。

私が「日本とは違うなあ。」と感じさせられたできごとを１つ例に挙げてみます。

私のホームステイ先の家は、とても裕福な家でした。大きくてきれいなマンションに住み、何台かの車を所有していて、その車を運転する運転手をやとっていました。ホストファミリーは私にとても優しくしてくれて、１泊だけでしたがその間、とてもくつろぐことができました。

ファミリーとも打ち解け、記念に写真を撮ることにしました。何枚か写したあと、「お世話になった運転手さんとも写そう。」と思いカメラを向けた時です。私はホストファーザーに止められました。中国語で何か言われました。どうやら撮ってはいけないようです。私は仕方なくあきらめましたが、後で通訳さんが訳してくれたことを聞いて、非常にショックを受けました。

「この人は家族ではないから写してはいけません。」

なぜなのでしょうか。お世話になった人といっしょに写真を撮ることがいけないだなんて。家族としか写真を撮ってはいけないなどという決まりでもあるというのでしょうか。

中国では、家族と使用人の立場の違いがハッキリしているそうです。現代の日本人との感覚とは少し離れているように思いました。

必ずしも平等とは言えないこの扱いに、私は最初は多少のしこりを感じました。しかしよく考えてみると、それは「日本人」の尺度でしか測っていなかったことに気付きました。

日本では平等なのが当たり前、平等でないとダメだという考え方は、中国では通用しないのかも知れません。自分の国を基準としてのものの考え方は、「基準から外れている＝ダメだ」という誤解につながりかねません。こうだから良い、こうだから悪い、という考えにとらわれていては、見失うものがきっと多くなってしまうと思うのです。

「その国をまるごと受け止め、まるごと認める。」国際理解にまず必要なものは、そういう視点をもつことだと思います。

楽しかった事も、気付き学んだ事もたくさんあった中国での６日間。とても貴重な体験をさせていただき、今回お世話になった全ての人たちに対して、感謝の気持ちでいっぱいです。

本当にありがとうございました。

公安の人といっしょに

初めての中国

高松市立下笠居中学校
白　井　つかさ

中国は、私の想像をはるかににこえる事ばかりでした。私の想像では、道路には自転車が主に走っているものだと思っていました。でも、実際見てみると、全然ちがいました。なんと、道路にはほとんど、バスかタクシーしか走っていませんでした。しかも、そのバスとタクシーは、ほとんどノンストップ状態でした。それには、本当に驚きました。

もう一つ驚いたのは、ホームステイでの事です。私と同じ中学生は、アニメが好きで、日本のアニメのポスターや、ハガキなどもたくさん持っていて驚きました。私は、１人で「日本のアニメ、すげー。」と言ってしまいました。テレビでは、中国語の字幕が出ているスラムダンクがかかっていたり、モーニング娘やＳＭＡＰの写真もあったり、すごかったです。

ホストファミリーのみなさんは、私を温かく出迎えてくれて、すごくうれしかったです。でも、やっぱり言葉には困りました。英語がすごく上手で、辞書があっても大変なくらいで、もう泣きそうでした。でも、ホームステイに行く前に、「ホームステイ、がんばってね。」と知らない日本人の若い男の人に言われたことを思い出して、なんとかがんばりました。その後は、その人とは会っていませんが、もし会えたら、お礼がしたいと思っています。ホームステイでの話に戻りますが、私は家族の人に折りづるを教えてあげました。その後に、私と同じ中学生の子の友達も来て、プレゼントをくれました。中身は、私がさっき教えた折りづるのすっごくすっごく小さく作った物が、たくさん入っている箱でした。たぶんその子が作ったんだと思います。私は、「ちょっと待ってよ。なんで、こんなに細かいことができるのさ。」と思い、さっき教えた折りづるは、なんだったんだろうと思い、ちょっとショックでした。その友達は、私といっしょに泊まりました。それは、良いのですが、なぜか次の日の朝ごはんを、その友達が作っていたのです！なんで友達が、人の家で朝食を作ってんだぁーと叫びそうになりましたが、このなぞは、今だにとけていません。たぶん一生のなぞになりそうです。

万里の長城にて

私は、この経験を通じて、中国にはいろんな文化と風習があることを知りました。それを、自分の目で見て、触れて、感じたりすることができて、本当に勉強になったと思います。この経験を生かし、いろんな事に挑戦したいと思います。この「中学生訪中親善使節団」でお世話になったみなさん、本当にありがとうございました。また、いつの日か、みんなで会いましょう。再見。

友情は国境を越えた

高松市立協和中学校
須　田　あさみ

ドキドキドキドキ…。

中国での６日間、私の胸は高なりっ放しでした。いろんな時、いろんな場所で、緊張したり、びっくりしたり、感動したり。

あの時も、そうでした。会議室に訪れたホームステイ先の中学生たち。みんな興味津々といった感じで私たちのことを見ています。

そう、今日はいよいよホームステイ！言葉はちゃんと通じるんだろうか。家族はどんな人たちなんだろう。夜、眠れるかな。そうだ、おみやげも渡さなきゃ…。自分でも心臓の音がきこえてくるようでした。

でも、ホームスティ先の女の子に出会って私の不安は一気にうれしさにかわりました。その女の子がとてもやさしく、私の手をひき、肩をだいて家族のもとへ連れていってくれたからです。あったかい手と笑顔にホッとして、それからは、家へ向かう車の中でも、家族の人たちと積極的に話をすることができました。

ホストファミリーの一家はみんな本当に親切にしてくれました。まず、お風呂は一番最初にいれてくれて、その後街へ買い物に連れていってくれました。（でも行ったデパートは着いたとたん閉店…。残念。）いつも私の体調とかを気にかけてくれて、ひまさえあればバナナをくれたのが印象的でした。しかもそれがすごくおいしい！そしてその女の子も、家族のみんなも日本から持ってきた写真を見せながら友達の話をした時、私の話をとても一生懸命聞いてくれたのがいちばんうれしかったです。むこうからもどんどん質問してくれるし、私のことをもっと知ろうとしてくれる熱意がよく伝わってきて本当に楽しい夜でした。

もちろん、思うように気持ちが伝わらなかったこともあったけど、ホストファミリーの方たちはいつも「分かろうとする心」を持ってくれていました。本当に短い期間ではあったけど、私たちのあいだには確かな「国境をこえた友情」が生まれていたんだと思いました。

南昌の中学生を訪問して交流会をした時にも、南昌の中学生たちは、とても積極的に日本を知ろうとしてくれていました。それを見て私も、とにかくやって良かったという気持ちになれたし、少しでも日本の文化を伝えることができたという達成感でいっぱいでした。

この６日間。長いようであっという間に過ぎていったのは、充実していたからだと思います。そしてこの旅を通して、中国の文化や歴史、人々のぬくもりに触れることで、きっと他の人がもっと長い時間をかけて見つけるものに出会えた気がします。苦しかったこと、つらかったこと、泣きそうになったこと、うれしかったこと、楽しかったこと、心うたれたこと。みんなみんな、大切な思い出です。私を支えたくれた人たちみんな、すてきな出会いと旅を、ありがとう。

第19中学校での交流会

夢のようだった六日間

高松市立紫雲中学校
高　田　明　奈

私が、使節団員として過ごした6日間はとても充実したものでした。出発前、ほかの団員とは仲良くできるだろうか、中国の方たちに失礼なく交流を図ることができるか、などといろいろな不安もありましたが、無事に帰国しました。団員とも仲良くでき、中国での良い思い出がたくさん作れました。特に印象が強いのが、ホームステイと中学校訪問、そして万里の長城です。

ホームステイ先の家族は皆とても優しく、温かく手厚い歓迎で迎えてくれ、緊張していた私はとても嬉しかったです。でも、日本の我が家との違いでとまどったことがあります。まず、おふろの入り方と、寝具でした。おふろは、下に大きなタライを置いて、その中に入ってシャワーを浴びるものでした。なかなか上手くは入れず、周囲に水をこぼし迷惑をかけてしまったと思った時も、相手の方が「気にしないで。」と拭いて下さって恐縮しました。寝る時も、厚いマットのようなものの中に入って、その上から毛布をかけるものでした。その使い方がよく分からず困ってしまいました。それとホームスティ先の朝食にいただいた牛乳は、なんとビニール袋に入っているもので、味もやはり中国風？で一味違う？ということで、あの味はいまだに覚えています。

中学校訪問では、門の所で生徒たちが立って出迎えてくれて、思いっきり派手に、歓迎の意の表現を受けました。あらためて親善使節の一員であることを認識しながらも、少し気恥はずかしいなと思いつつ、その間を通りました。授業を参観して、そのハイテクにとても驚き感嘆しました。中国の中学生は、とてもよく勉強をすると聞いていたけれど、予想以上に勉強熱心で、その姿は真剣なものでした。私も見習った方がいいかな、と感じたものです。

そして、万里の長城です。とにかくでかい、大きい！グレイト！いよいよ長城を見学することになり、最初は楽、でもだんだんと、とてつもない急な坂に変わり、30cmぐらいの高さの階段となり、最初に想像していたよりもきつかったです。長城は、秦の皇帝が遊牧民の侵入を防ぐために造ったんだなぁ、これは侵入するにも苦労するよ、侵入しようとする間に見つかるね、と思いながら、重い足をあげて登り進みました。とても疲れたけれど、てっぺんから見た万里の長城の風景はとてもきれいで壮観なものでした。また、機会があったらあの大陸の風景をまた見たいなあと思い出し思い出しして、使節団で学び感じたことをこれからに生かしていきたいと思います。ただ、他の国の人々との友好を深めるためには、ボディランゲージ、相手を思う心だけの交流では難しく、言葉の必要性もひしひしと感じました。

ホストファミリーと

最後に中国、特に南昌の人々に謝謝。再見。

貴重な体験をした6日間

高松市立勝賀中学校
鍋　嶋　明　子

この6日間が私にとってすごく貴重な体験となりました。やはり、一つ目に心に残っているのはホームスティでの体験だったと思います。日中友好会館でホストファミリーと会い、車で家へ向かう間、英語もあまり通じずに、「これから一晩だいじょうぶかな？」とすごく不安でいっぱいでした。だけど夜ご飯の時に必死でしゃべった「好吃！」という「おいしい」という言葉が通じ、ホストファミリーはすごく喜んでくれました。その後も、私の家族の写真を見せながらジェスチャーで紹介すると分かってくれて、楽しくてすごく一晩が短く感じました。朝になり、別れの時はすごくつらかったです。この一晩はきっと一生に一度の貴重な体験だったと思います。

2つ目はやはり万里の長城に登ったことです。北京はとても寒かったけれど、寒さをふっとばすいきおいで登りました。最初はみんなではしゃぎながらルンルン登っていたものの、万里の長城はすごく長くて急で「もうこのへんでひきかえそうか。」ということになり、昔の人はよくこんな大きなものを建てたなぁー。」と思い、中国の歴史をすごく感じた万里の長城でした。

3つ目は私の大好きな買い物と中華料理!!買い物は日本とちがって中国では交渉すると値下げしてくれて、それがおもしろく、たくさん買い物をしてしまいました。「日本でも値下げ交渉ができたらいいのになぁー。」なんて思いました。また料理のほうでは、毎回毎回すっごくおいしい本場中華料理を食べたので、満足満足でした。最後の日の北京ダックはその場でアヒルの丸焼きを切ってくれてびっくりしましたが、おいしく、むしゃむしゃと食べてしまいました。行きにはいていったジーパンが帰りにはきつくなっているほどたくさん食べました。けれどやはり6日間の中華料理は油っこく、日本食が恋しくなる時もありました。

このようないろいろな楽しく、貴重な体験ができたのも、この機会を与えてくれた国際交流協会の方々や団員のみんなのおかげだと思います。団員のみんなはすごくいい人ばかりで、すぐ友達になれて、不安でいっぱいだったこの中国旅行をすごく忘れられない思い出としてくれました。そしてこの中国旅行を通して、学んだたくさんのことをいろいろな人へと伝えていくとともに、これからの自分の将来にも役立てていきたいです。

最後に、私は今、言葉に表せないくらいの感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。いつかまた、きっとこの思い出深い中国へ行きたいです。

みんなで ピース

私はビンチー・ナイジンズ

高松市立屋島中学校
浜　崎　奈津子

「ビンチー・ナイジンズ」とは私の中国語の名前。この飛行機を降りたら私は「浜崎奈津子」じゃなく、「ビンチー・ナイジンズ」なんだ。こんなことを思いながら上海空港に着いた。中国との初対面は雨だった。

この６日間の長く短かった旅で１番楽しみであり、不安でもあったホームステイ。「どんな子が迎えてくれるんだろう。言葉は大丈夫かな。コミュニケーションはきちんととれるかな。」これは、ステイ先の家族に出会う寸前まで思っていたこと。なんでこんなにドキドキするのだろうと思うほど緊張した。手に汗を握りしめた。この時は楽しみなんて言葉は私の頭の中になかった。ただ不安で仕方なかったんだ。

「你好。」彼女は笑顔で私の手を握りそのまま家族のもとに連れて行ってくれた。満面の笑みで迎え入れてくれた家族。心の緊張が少し緩んだ。スーツケースを運んでくれるお母さんに「謝々。」と一言。すると、にっこりと私に答えてくれた。言葉の伝わることの喜びを知った。

家に着いて驚いた。私用のベッドやイスがあった。用意して待っていてくれたのかと思うと、胸が熱くなった。夜の街に連れて行ってくれ、その間中ずっと手を握っていてくれて、水たまりや段差があると教えてくれ、とても親切だった。

相手は英語でたくさん話をしてくれるけど、聞き取ることで精一杯の私。話したいことは山ほどあるのに上手く口にできず、少しくやしい気持ちになった。もっと、英語が話せたらと。

ステイ先での時間はあっと言う間に過ぎたけど、私を大きく成長させてくれた貴重な時間だった。行く前は不安だったのに、別れの時は「もっと一緒にいたい。」何度も思った。不思議だ。たった一晩、しかも国も言葉も違うのにこんな感情が生まれるなんて。言葉や国が違っても関係ないんだ。大切なのはやっぱり心。それを感じることができた私は、すごく幸せ。またホームステイしたいな。

この旅はすごく楽しく有意義なものになった。それは、良い仲間に出会えたから。行く先々で感じたり思ったことを語り合った。万里の長城では、あまりの立派さに「本当に人が作ったもの？」と。しかしそのすばらしさの陰には、たくさんの人の命が消えたり、普段の努力があったことをガイドさんから聞いた。すると、ただすごいというのではなく歴史の重さ、大切さを感じた。

私はこの旅に参加してよかったと心から思う。それは旅の目標でもあった「自分に自信をつける」ことができたから。中国に行きたくさんの刺激を受け成長することができたから。そして、たくさんの素敵な仲間ができたから。

ホームステイ先で

たくさんの初体験と得たすばらしいもの

高松市立紫雲中学校
真　鍋　絵　美

ザァ――…
「雨降ってるよ…。」
日本から飛び出して、私は高松市から派遣された使節団の一員として、中国にやって来ました。初めて中国の大地を踏みしめた一日目は、あいにくの雨でした。まるで私たちの不安を物語っているかのように、灰色の空からあとからあとから水が落ちてきました。でも、ついに中国にやって来たんだ！何が待っているのだろうか。この異国の地で！というような期待の気持ちが、半分ほどの不安を押し流してくれました。残った不安というのはホームステイの事が主でした。でもホームステイは２日先。旅は始まったばかりでした。

しかし、南昌でのホームステイの日はすぐにやって来ました。私がお世話になったのは、黄静瑶ちゃんの家でした。一人で、ということもあり、とても心細く不安だったのですが、温かく迎えてくれた家族の皆さんのおかげで、最初に感じていたこの気持ちはいくぶんかやわらぎました。でも、会話がうまくいかず、困ったり、とまどったりすることはよくありました。この時ほど英語がペラペラ話せたら……と思ったことはありません。もっとたくさんいろいろな話をしたいのに話すことができない。とてもくやしかったので、今まで以上にもっと英語をがんばろうと思いました。結局は、身ぶり手ぶりの方が多かったのですが、言葉はうまく通じなくても、同じ人間どうし、心で通じることができるんだなぁ、と思いました。いっしょにいる時間は短かったけれど、静瑶ちゃんや家族の皆さんと仲良くなれたので良かったです。お別れの時がとても名残惜しく、何度も何度も「謝謝！」や「再見！」と言いました。黄さん一家には、お世話をたくさんかけたし、貴重な体験もさせてもらいました。一言では言い表すことができないくらい感謝しています。本当にありがとうございました。謝謝！

たくさんの思い出ができた南昌を後にして、私達は、北京へと飛びました。そこでは、中国の長い歴史を感じさせる建物を見学することができました。今まで写真ぐらいでしか見たことのない、故宮や天安門、万里の長城を本当に自分の目で見ることができたのです。故宮や天安門は、とても広く、たくさんの人がいました。門がいくつもあって、どの門をくぐっても、前にも後ろにも人人人…。流石中国の歴史的な建物だと思いました。歴史的なだけではなく、故宮、天安門は、黄色の屋根に紅の壁。そして１つの建物は左右対称に造られていて、とても神秘的できれいでした。いや、美しかったです。

万里の長城は、自分的にはけっこうがんばって登りましたが、高い階段とすごい坂に参ってしまい、長距離走をしたときのようにヘトヘトでした。でも、苦労して登ったかいあって高い所から見た景色は絶景でした。この、どこまであるのか見当もつかない万里の長城を人の手だけで造ったというのは、当時弥生時代だった日本には考えられないことです。中国四千年という言葉は、だてじゃない、と今さらながら思いました。長い歴史が中国を育ててきたのでしょう。この日は、中国の歴史の深さに感動しっぱなしでした。

長いようで短かったこの旅。中国の中学生と交流ができたり、ホームステイをしたり、たくさんの建物を見学したりと、たくさん貴重な体験をさせてもらいました。このことは、一生心に残ると思います。高松市国際交流協会の方々、松井団長先生、白井さん、田中さん、団員の皆さん、中国で出会った方々、そして、お父さん、お母さん。本当にありがとうございました。謝謝！

第19中学校にて

私　の　中　国

高松市立紫雲中学校
真　鍋　多　恵

中学生訪中親善使節団は、私にとって、初めての海外に行くチャンスでした。そして、中国の文化と日本の文化の違いを知ることと、ホストファミリーたちとの会話や日本に帰ってから彼らと文通することが目的でした。しかし、中国とは言葉の壁があるだけでなく、文化の大きな違いもあるので、うまくコミュニケーションができるかどうかとても不安でした。その不安と、長い歴史を誇る中国に対する畏敬の念と興味を胸に抱き、３月24日、私は西へ飛び立ったのです。

生活面で一番違う事は、毎朝早起きをし、朝食前にお寺参りに行く事です。毎朝続けるという行為から信仰の深さがうかがえます。(今の日本人で同じ事をしている人は、ごくわずかだと思います。) 何をしても三日坊主の私には、きっと無理だろうな、と思いました。

ホストファミリーに優しく迎えられ、とても楽しい一夜を過ごすことができました。初めに心配した通り、言葉の壁はとても厚く、英語ではなく、英単語で話しました。しかし、彼らがもてなしてくれた料理の中に、「家族」と言う意味のものがあり（実は、その料理の意味は後で通訳の方から教えていただいた）とても嬉しかったです。一泊という、短い期間でしたが、中学生同士の交流はもとより、両国の文化の違いにも触れることができ、良い思い出となりました。

中国といえば、万里の長城とお茶が浮かびます。長城は思ったより長く、階段の高低差が激しく、おまけに寒かったです。こんな大量の石を運んできて積み上げるなんて、並大抵の労力ではないはずなのに、ここまで大きいなんて…「すごい」の一言につきます。お茶の入れ方には、かなり驚きました。日本の湯のみの大きさと全然違うこと（中国のはかなりミニサイズ)、飲み方にも種類があること、飲む順番があること…etc日本のお茶よりかなり苦かったけれど、かおりは「さすが中国！」でした。

中国に行く前、何を見て何を感じるか、という自分なりの課題がありました。はっきりとした答えを見つけることはできませんでしたが、私の心には一生残る財産ができました。これからは、自分の視野を広げるためにも国際協力に参加したいと考えています。最後に、お世話になった方々に、お礼を言いたいと思います。本当にありがとうございました。

ホストファミリーと

「你好」そして「謝謝」へ

高松市立古高松中学校
宮　崎　沙　月

「你好」中国。中国は本当に前から好きな国でした。その中国に行くことができたことはとてもうれしく、市の代表として行くことの責任感も感じました。

一番の思い出となったのはホームステイをしたことです。不安と緊張でいっぱいの私を迎えてくれたのは、温かく優しい笑顔でした。「黄瑾」さんの家でした。困ったことは、I can't speak Chinese やbeautiful などの英語が通じず、ショックを受けたことです。なので晩安や好吃などの本当に少しの中国語と、お風呂、トイレ、ご飯などをジェスチャーで表現しました。そんな時、日本で日本語が通じることのうれしさを知りました。でもホストファミリーの人に自分の気持ちを一生懸命に伝えること…すばらしいことだなぁって思いました。そして夜には、たくさんの店のある所や橋を見に行ったり、おかしをたくさん買ってもらいました。すごく楽しかったです。

ホストファミリーの人との別れは非常につらいものでした。言葉が通じなくても、親切にしてくれて…。手紙を書く約束をしました。でも涙が出ました。

別れは悲しかったけど、その分楽しかったのが「交流会」でした。私は研修で何度も練習したパラパラを踊りました。うまくいったので、とてもうれしかったです。びっくりしたのは中国の中学生の元気よさです。活気に満ちていて圧倒されました。班の出し物だった「ジャンケン汽車ポッポ」も、盛り上げることができたので楽しかったです。この時できた中国の友達も大切にしていきたいと思います。

やっぱり中国といったら「万里の長城」でしょう。登ってみて初めて“万里”という意味が分かったような気がします。人が作ったなんて全然想像できません。だって登ることですらとてもしんどいことだから…。人の手で作るといえば「故宮」もありました。すごく造りが細かくて、ここでも中国の人のすごさを知りました。

最後ですが、中国は値切りがすごいと思いました。値切りがものすごく楽しくて、友達と電卓を持って、いろんな店を走り回っていました。安かったので家族や日本の友達にたくさんのお土産を買いました。

中国に行ったこと。これは将来絶対プラスになることだと思っています。市の代表で行ったということ、中国の人の優しさ、中国の熱気、絶対に忘れません。これからの未来、私は国際人になって海外にたくさんの友達をつくろうと思っています。その最初の機会を与えてくれたお父さん、お母さんに感謝しています。それと楽しい思い出をいっしょに作ってくれた団長先生や白井さん、田中さん、陳さん、使節団のみんな、本当にありがとうございます。この貴重な6日間をいろんな場面で生かしていきたいと思います。中国…また行きたいなぁ。…みんなみんなに「謝謝」

万里の長城入口にて

上海・南昌・北京、中国見聞録

大手前高松中学校
宮　武　恵　里

１日目、上海。私たちが中国に着いたのは夕方であった。東方明珠塔（テレビ塔）に向かうバスの中から見た上海の町はとても奇麗で、まるで神戸のようだった。

さてテレビ塔はというと、あいにくの天気のため視界はゼロ。少し残念だった。

２日目。この日は朝からパンダを見に行った。私たちが行った時、パンダはまだ寝ていた。すぐに起きたが同じ動きをずっと繰り返すばかり。それでもかわいかった。次に行った上海博物館は新しく、展示物も素晴らしかった。もう少し見学したかったと思う。玉仏寺は「これぞ中国！」という感じで、とにかくすごかった。そして玉仏は美しかった。

その日の夕方、私は生まれて初めて夜行列車に乗った。飛行機より快適だった。

３日目、南昌。すごい人だった。上海より北京より人の熱気がすごかった。 滕王閣も、八一記念館も、それなりに心には残るが、私にとっては人と町のほうがより強く印象に残っている。自転車も自動車もオートバイも手押し車（？）も、広い広い道路をうめつくさんばかりの多さで、それはもう、驚いてしまった。そしてさらに驚いたことには、信号無視が、車間距離が！…怖い。バスに乗っているとそうでもないのだが、ホストファミリーの人の車に乗った時、ジェットコースターの２倍くらいのスリルを味わった。広い中国が狭かった。

南昌で出会った市長さんやホストファミリーの人々、中学校の人々は皆やさしく、いい人ばかりだな、と感じた。あらゆる意味でよい経験をさせてもらったと思う。

５日目、北京。実は私は、この北京を一番楽しみにしていた。故宮はラスト・エンペラーというビデオで見て、一度行きたいと思っていたし、万里の長城も本で読んだり話に聞いたりしていたので、是非この目で見たいと思っていた。そして、実際に自分の目で見た故宮と万里の長城は素晴らしかった。

故宮は思ったよりも、さらに大きくて、いたるところに竜などを刻んだ石や細かい模様が施されていた。ガイドさんによると、段のある所にかならずある竜の頭の形をした石は、大雨の日、竜が水を吹くようにできているそうで、少なからず感動した。次に中国を訪れる時があれば、故宮のみ５日間くらい見てまわりたいと思う。

交流会にて

万里の長城は、テレビで何度も見たけれど、やはり実物を自分の目で見るというのは、テレビとはまた違っていた。斜面はとても急で、まるですべり台のようだし、見おろすと、地面が遠かった。そして、果てしなく長い。人がたくさん死んだというのが妙に納得できてしまった。

６日目、帰路につく。どうやら疲れていたらしい。急に熱が出た。最後の日でよかったような、悪かったような。

そんなこんなで、最後の最後まで大変な旅だったけれど、よい旅だった。また行きたいなぁ、中国。

感動の連続だった旅

高松市立桜町中学校
森　　貴　幸

中国は日本と比べものにならないくらい大きかった。支流なのに向こう岸が見えない川や、町がまるまる一個入りそうなくらい広い故宮、どこまで続くきつい坂の万里の長城、上海のビルやタワーなど、高松では見たことのないような大きなものばかりだった。日本がどんなに小さいか思い知らされた。国の大きさや文化が違うと言ってしまったらそれまでだが、それだけではない、言葉では言い表せないようなすごさがあった。圧倒された。一度中国に行って自分の目で見てみるとよく分かると思う。絶対に感動する。中国はそんな国だった。

しかし何よりも感動したのは南昌でのホームステイだった。僕は胡云从君の家にホームステイさせてもらったが、胡君や胡君のお母さん、近所の吴さんもみんなとても優しくしてくれた。とてもうれしかった。友好会館から胡君の家へタクシーで送ってもらったとき、一言も会話がなかった。というかできなかったのでとても不安だったが、家に着いてからは何とか話をすることができた。でも通じた中国語は「謝々」や「你好」「好吃」ぐらいだった。あとはほとんど筆談か英語。だから自分の言いたいことがうまく表現できなかったし、相手の言いたかったこともうまく理解できなかったかもしれない。そこがとても残念だった。言葉という壁があった。その日はほとんど筆談で話した。声のない会話はどこか悲しかった。でも胡君もお母さんもとても明るくて最後には身ぶり手ぶりや僕の下手な英語で話すことができた。とても楽しい一日を過ごすことができた。次の日は、南昌の中学校を訪問した。そこでの交流会では忘れられないいい思い出ができた。言葉は通じなかったが、でも言いたいことは伝わったと思う。ホームステイや交流会を通して国や民族、文化や言語などの壁を越えることができた。そう思った。お別れのときはさすがに涙の感動の別れとまではいかなかったけれど、見えなくなるまで手を振り続けてくれたその姿は胸にじんときた。もう会えなくなるのかと思うとすごく寂しくなった。初めはうまく話せなかったり、伝わらなかったことばっかりだったれど、それでも最後にお互いを分かり合うことができて、とてもうれしかった。一生忘れられない思い出ができた。ありがとう、胡君。

あたりまえのようだが中国へ行ったら周りは全部中国語。飛行機や列車の放送や看板から観光地の人たち、道ばたですれちがう人たちやホームステイ先でも全部中国語。店で買い物をするときは日本語が話せる店員さんがどれだけありがたかったか。ホームステイ先でもそうだったが、言葉が通じないことがどんなに辛いことなのかが、身に染みて分かった。言葉の大切さがすごく分かった。でも看板などは見るだけで笑えるようなものもたくさんあった。でもやはり読めない物の方が多かった。中国から日本へ帰ってきたとき、関西空港での日本語の放送、日本語の看板、日本語を話す人たち、周りが全部日本語というのに気づいたとき、言葉が通じるってすばらしい、とあたりまえのことに感動した。日本で道を渡るときにも車かわざわざ止まってくれることにも感動した。中国では決して止まってくれない。南京路では危うくタクシーにひかれそうになった。日本に帰ってからあたりまえのようなことにもたくさん感動した。あまりまえのことがあたりまえじゃなかったことが6日間も続いたからかもしれないが、物の見方がかなり変わったような気がする。改めて日本というものを知ることができた旅でもあった。

ホストファミリーと